

## 江東の名所 ⑤

## 水辺の田園風景を行く—砂村・大島—

江東区深川江戸資料館

## 1 江戸文人の遊覧紀行

『遊歴雑記』の著者、大浄敬順は、たびたび江東地域を訪れてその風物を楽しみました。本書は5編15巻15冊からなる近世最大規模の説話集で、文化11年(1814)に刊行されています。江戸近郊の名所旧跡・社寺、風俗・習慣について記されており、当時盛んに編まれた地誌的な性質を帯びた随筆と言えます。敬順は江戸小日向廓然寺の住職で多芸多能の趣味人でした。

洲崎・砂村近辺の水辺は、特に敬順のお気に入りの遊覧コースだったようです。本文からは、敬順が、独りであるいは友人たちと、舟や徒歩での散策を楽しむ様子が伝わってきます。まずは、この敬順の2度の遊覧を紹介するところから始めてみましょう。

## 「砂村新田元八幡宮の逍遙」

この日のコースは「洲崎弁天⇒桜並木⇒波除堤⇒砂村元八幡」です。その道のりは、川に沿って二十余町、三つめの板橋を左へ曲がり、また川に沿って数十町、とひたすら川沿いを行きます。すると、左右見渡す限り芦原の桜並木以外には木もない景色が広がる、と述べています。さらに波除堤を歩き続けた後、東方の眺めは「目に障る物なく、唯蒼海の青みたる風色いはん方なし」でした。そのような中に現れるのが砂村元八幡の石の鳥居です。敬順は境内の様子を「別世界の如し」と表現しています。西北には「耕地」、東西は「蒼溟海」が果てしなく見晴らせ「風色に於ては奇々妙々、久しく憩ひて飽だるの地也」と感嘆しています。

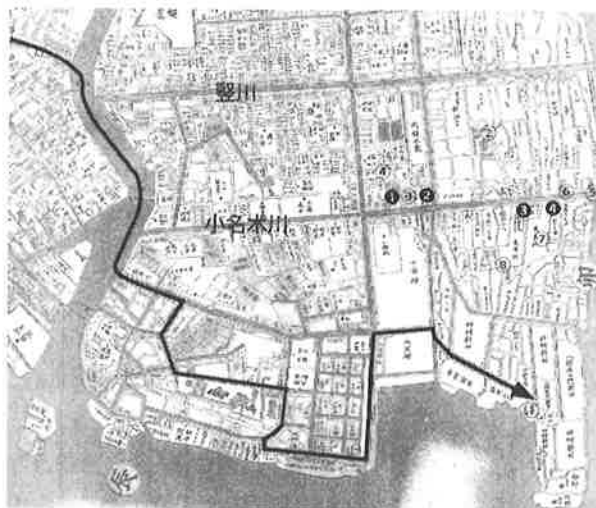
## 「砂村新田元八幡の再遊」

8月に友人5、6人を誘っての遊覧。舟に乗り神田川、隅田川を下り、正覚寺橋(海辺橋 江東区)で降ります。その後は歩いて富岡八幡宮に参詣し、「初音や」の田楽を食べ、三十三間堂を見学。そして洲崎弁才天までは海辺の景色、砂村元八幡までは砂村の耕地の眺望を満喫しています。元八幡での飲宴と詩歌はまさに「俗境を離れし雅遊」だったようです。

隅田川の東岸、江戸市中から見れば川向こう。そこには、現在では考えられないような水辺の田園風景が広がっていました。しかも舟と徒歩での遊覧が日帰りで楽しめる、「癒し」の空間だったのです。

## 2. 川沿いの道しるべ

因みにこれらのコースを当時の地図に記してみると矢印のようになります。もちろん散策コースは他にもあり、そのことを推測できる資料として道標があります。砂村・大島の主な名所とあわせて、地図に落としてみました。



『天保御江戸絵図』(部分) 天保14年(1843)

## ◆『遊歴雑記』の道程

- ◆道標 ①五百羅漢道標 ②五百らかん道標  
③亀高村弘法大師道標 ④鬼子母神道標

\*江戸時代の位置で示してあります。

- ◆名所 ①砂村元八幡 ②五百羅漢寺さざみ堂 ③五本松  
④猿江麻利支天 ⑤中川番所  
⑥塩なめ地蔵(宝塔寺) ⑦鬼子母神(上妙寺)  
⑧弘法大師七十七番札所(持宝院)

\*この他にも大名屋敷内の稲荷などがありました。

道標は道行く人に目的地を案内する道しるべで、道の分岐点や辻に設置されるのが一般的です。砂村・大島の道標の特徴は小名木川沿いに立てられていることです。この地域で、舟での遊覧や川沿いの散策が名所巡りのコースになっていたことがわかります。



五百羅漢道標(文化2年(1805)在銘)『江東区史』より

### 3. 田園風景の名所

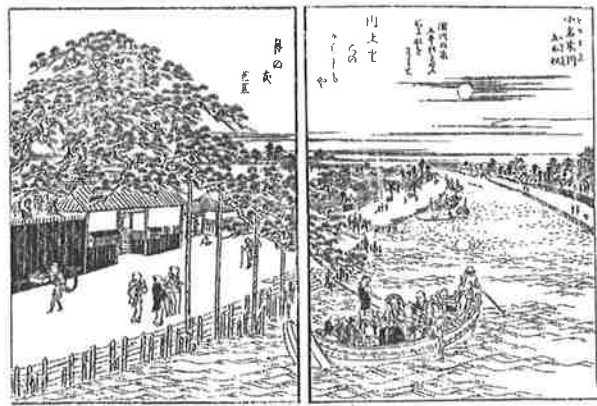
風光明媚な田園が広がるなかに、どのような名所があったのでしょうか。ここでは代表的な名所を3箇所取り上げて説明します。

#### ◆富岡八幡宮（砂村元八幡）

敬順が「別世界の如し」と感動した当社も、地元の人々にとっては、砂村新左衛門一族によって埋め立て開拓された砂村の鎮守社です。海原や田園の広がる眺望のすばらしさなどが人々を惹きつけたのでしょうか。江戸庶民のあいだでは名所として意識されるようになります。深川の富岡八幡宮あたりから当社までの道にある桜並木も有名でした。その様子は歌川広重の『名所江戸百景』にも描かれています。現在、境内の碑にある五明橋石文（ごみょうきょうせきぶん）の「ここにそ 鳥居ありたき 汐干道」はこの道を詠んだ句です。海づたいの道をそろそろ鳥居が見えてもいい頃ではと思いつつ海辺の風景を楽しむといったようすが伝わってきます。

#### ◆五百羅漢寺さざみ堂

江戸時代のガイドブック『江戸名所図会』の中で、江東区内の名所としては最も多くの絵と文で紹介されています。元禄8年(1695)に建立された黄檗宗の寺院で、仏師松雲の彫った等身大の羅漢像500余体が安置され、名所となりました。また境内にはさざみ堂もありました。さざみ堂とは3階建ての観音堂で、観音札所の百観音百体が納められており、このお堂を参詣するだけで、西国三十三番・坂東三十三番・秩父三十四番の100ヶ寺を参詣したことになります。しかも1階から3階まで一度も同じ場所を通らずに全ての観音像を拝観できる非常に複雑な構造になっていました。下の挿絵では左側の絵の真ん中辺りに描かれています。



小名木川五本松『江戸名所図会』天保7年(1836)

#### ◆小名木川五本松

小名木川に覆いかぶさるようにして枝を張り出した古松でした。九鬼家の屋敷内より道路を越えて川まで覆っていたというのですから、相当見事な松だったと思われます。挿絵のようにして舟での遊覧や月見を楽しむ際には、絶好のスポットになっていたのでしょうか。おそらく「小名木川治いの松」として、川とセットで名所になっていたと思われます。残念ながら明治40年には枯れてなくなってしまい、今ではその姿を見ることはできません。

### 4. 都市と農村の境

敬順の紀行文や『江戸名所図会』五百羅漢寺の挿絵からもわかるとおり、水辺と田園という景色、眺望のよさそのものが、この地域の名所を支えていたと言えるかもしれません。江戸市中で日常生活をするものにとっては、川向こうで都市のはずれ、しかし完全な農村でもない、境界的な異空間に感じらる独特の地域でした。



五百羅漢寺三匠堂『江戸名所図会』天保7年(1836)